

ヒロシマ・ピース・センターだより

2024年

No.31



ヒロシマ・ピース・センターは、平和へのさまざまな願いを込めて、本年も「谷本清平和賞」の贈呈式を開催いたします。

第36回目の「谷本清平和賞」は、被爆死した米兵捕虜について長年にわたり調査する活動を続けている歴史研究家で被爆者の森重昭氏に決定しました。

森氏は、会社勤めの傍ら粘り強く独力で調査を進め、原爆投下時、米兵捕虜12人が原爆の犠牲になっていたことを突き止められ、そして、その遺族を探す活動を長年にわたり続けてこられました。2008年には調査・研究の成果を「原爆で死んだ米兵秘史」として出版されました。2016年5月に米国の現職大統領として初めて広島を訪れたオバマ氏に、感謝とねぎらいの意を込めた優しい抱擁を受けられる姿が世界へ伝えられました。その後も、長期の調査活動を通じて、米兵遺族との交流や長崎原爆で死亡した連合軍捕虜8人の名前と遺影を登録する活動も続けてられています。

ヒロシマは被爆から今年で79年目を迎え、2024年平和記念式典では松井一実広島市長が「平和宣言」で「争いを生み出す疑心暗鬼を消し去るために、今こそ市民社会が起こすべき行動は、他者を思いやる気持ちを持って交流し対話することで『信賴の輪』を育み、日常生活の中で実感できる『安心の輪』を、国境を越えて広めていくこと」と読み上げました。それは、まさしく「戦争というものは国籍も関係なく犠牲者が出る。敵も味方もない。原爆の悲劇に国境はない」と訴え続けている森氏の「想い」そのものといえます。今日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻、中東でのイスラエルとイスラム組織ハマスとの軍事衝突など世界各地で紛争が絶えません。今こそ「他者を思いやる気持ちを持つ」ことを、国境を越えて広めていくことが極めて重要なことであり、核兵器の廃絶にも寄与できる大切なことです。

また、外国人留学生による日本語の「世界平和弁論大会」は、ヒロシマで学ぶ若者たちが平和への思いを深め、世界中に発信継承されることを願って、国際平和の集いとして本年第33回目の大会を開催します。広島県内に留学中の高校生・大学生が出場し、ヒロシマで学んだことをとおして平和の大切さを発表します。

ヒロシマで学ぶ若者たちが、平和への思いを深め、世界中に発信継承され、核のない世界平和に向けた国際世論が高まることを願い、一日も早く「世界恒久平和」を迎えられることを祈念しています。

本財団は、これからも時代の要請に基づいた平和活動推進に、微力ながらも尽力していく所存です。皆様のご支援ご鞭撻をよろしくお願い致します。

理事長 鶴 衛

【本財団のおいたち】



財団創立者
谷本 清
(1909～1986)

本財団が創立された基本的精神は、原爆をうけた広島の生存者が尊い生命を犠牲にした人々を思い、世界人類に対して恒久平和を念願することこそ広島の実務であるという信念に基づいています。被爆直後、悲嘆にくれた広島の実状を視察して被爆者を取材し、核兵器に対する憤りと被爆者への愛といたわりで綴ったアメリカ従軍記者ジョン・ハーシー氏による名著「ヒロシマ」によって、被爆地広島への関心は広がり、と高まりをみせました。

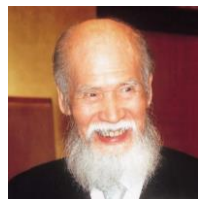
こうした時の1948年、谷本清氏（元：日本基督教団広島流川教会牧師）は、メソジスト教会ミッション・ボードの招きを受け、原爆による被爆の体験をもってアメリカを歴訪。15カ月の間31州、256都市、472団体において“被爆の惨状と平和の尊さ”を訴えました。

「ヒロシマ・ピース・センター」という名前は、この訴えに呼応してアメリカで生れ被爆地広島に継承され、広く世界平和の運動を推進する母体として1950（昭和25）年8月8日、財団法人として認可されました。谷本清氏は、本財団創立以来理事長を務め、再三にわたってアメリカに渡り、原爆乙女の治療をはじめ精神養子縁組等の事業を実現し、国内外で“恒久平和の実現と人類の福祉増進”を図ってきました。

【谷本清平和賞】と【世界平和弁論大会】

1986年に谷本清氏の後を受けた二代目理事長鶴襄氏（学校法人鶴学園創立者）は、谷本清氏の偉業を祈念し、恒久平和実現と原爆体験の風化を食い止めるために貢献した人（団体）を顕彰し、より一層平和構築への推進力となつていただくことを願い、「谷本清平和賞」を創設しました。1987年ノーマン・カズンズ氏の第1回受賞をはじめ、今年の「スティーブン・ロイド・リーパー」氏の受賞まで35回の表彰をしてきました。

また、鶴襄氏は、若人たちが世界平和に対する関心を高め、国境を越えて平和実現のために手をつないでほしいとの願いから、1990年に第1回「世界平和弁論大会」を開催しました。こうした鶴襄氏の遺志は、谷本清平和賞と世界平和弁論大会を「国際平和の集い」として、本財団の基幹事業として今日まで受け継がれています。



谷本清平和賞
世界平和弁論大会
創設者
鶴 襄
(1915～2006)

【歴代理事長】

谷本 清 1950年～1986年（1950.8.8就任）

鶴 襄 1986年～2002年（1986.4.1就任）

橋本 榮一 2002年～2005年（2002.9.7就任）

鶴 衛 2005年～（2005.4.26就任）

公益財団法人ヒロシマ・ピース・センター

〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1の1

広島工業大学内

TEL (082) 921-4149

FAX (082) 921-6979

公益財団法人
ヒロシマ・ピース・センター

谷本清平和賞

第 35 回谷本清平和賞 受賞者 スティーブン・ロイド・リーパー 氏（贈呈式 2023 年 11 月 19 日）



【授賞理由】外国人として初めて広島平和文化センター理事長に就任され、平和市長会議の活動や全米における原爆展の開催、国際交流や協力事業を指揮されるなど、広島から世界に向けて核兵器廃絶を訴える広範な活動を展開されました。現在もアメリカと日本を行き来しながら、若者たちとともに平和について考える取り組みや平和に関する講演を各地で行うなど世界平和を熱く訴え続けておられます。よって、谷本清平和賞の趣旨に則り顕彰することとなりました。

第 34 回谷本清平和賞 受賞者 渡部 朋子 氏（贈呈式 2022 年 11 月 13 日）



【授賞理由】特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長として、被爆地広島を拠点に、平和教育・被爆体験の継承・核兵器廃絶と恒久平和の訴えなど多彩な活動の先頭に立ってこられました。とりわけ被爆による白血病で亡くなった佐々木禎子さんを紹介する絵本を翻訳して世界各国に届けるプロジェクトは大きな反響を呼びました。広島で被爆の実相を伝え、核兵器廃絶と恒久平和を訴える数多くの活動を続けておられます。よって、谷本清平和賞の趣旨に則り顕彰することとなりました。

第 33 回谷本清平和賞 受賞者 川崎 哲 氏（贈呈式 2021 年 11 月 14 日）



【授賞理由】NGOピースボートによる「おりづるプロジェクト」や核兵器廃絶国際キャンペーン（I C A N）の活動を通じて広島や長崎の被爆者の証言を世界に発信してこられました。こうした取り組みの積み重ねが国際世論を動かし、核兵器禁止条約の成立と発効や I C A N のノーベル平和賞受賞にも寄与しました。全ての国が核兵器禁止条約に加わるよう現在も精力的に行動を続けておられます。よって、谷本清平和賞の趣旨に則り顕彰することとなりました。

谷本清平和賞の受賞者・団体

第 1 回 1987 年 ハマン・カズノブ氏
第 2 回 1988 年 フロイト・シュモ氏
第 3 回 1990 年 栗原貞子氏
第 4 回 1991 年 森瀧市郎氏
第 5 回 1992 年 今堀誠二氏
第 6 回 1994 年 ジョン・ハーシー氏
第 7 回 1995 年 ヒロシマを語る会
第 8 回 1996 年 金 信煥氏
第 9 回 1997 年 村井志摩子氏
第 10 回 1998 年 江口 保氏
第 11 回 1999 年 伊藤隆弘氏
第 12 回 2000 年 ウォルト・フレッド・シッパ・センター
第 13 回 2001 年 河本一郎氏
第 14 回 2002 年 中沢啓治氏
第 15 回 2003 年 吉永小百合氏
第 16 回 2004 年 平岡 敬氏
第 17 回 2005 年 新藤兼人氏
第 18 回 2006 年 学校法人広島女学院

第 19 回 2007 年 在韓被爆者渡日治療広島委員会
第 20 回 2008 年 高橋昭博氏
第 21 回 2009 年 平野伸人氏
第 22 回 2010 年 夏の会
第 23 回 2011 年 坪井 直氏
第 24 回 2012 年 碓井静照氏
第 25 回 2013 年 小倉桂子氏
第 26 回 2014 年 サーロー節子氏
第 27 回 2015 年 秋葉忠利氏
第 28 回 2016 年 ビーターソンひろみ氏
第 29 回 2017 年 公益財団法人原爆の図丸木美術館
第 30 回 2018 年 森瀧春子氏
第 31 回 2019 年 矢川光則氏
第 32 回 2020 年 アーサー・ビナード氏
第 33 回 2021 年 川崎 哲氏
第 34 回 2022 年 渡部朋子氏
第 35 回 2023 年 スティーブン・ロイド・リーパー氏

日本語による世界平和弁論大会



第 3 2 回 日本語による世界平和弁論大会（2023 年 11 月 19 日）

最優秀賞受賞者 ラウラ マリー パロさん

題 「平和は選択」 広島中等教育学校（エストニア出身）

【要旨】1943 年、私のひいおじいさんは迫り来る戦線から逃れるため、引越し荷物をそりに載せて親戚の家に避難しているとき、二人の兵士に撃たれてしまいました。ひいおじいさんは亡くなり、兵士たちは馬とそりを盗み逃げ去りました。あの日、一人の命が奪われたことで、他の人たちの人生は永遠に変えられてしまいました。私のひいおじいさんは兵士でもなければ、シベリアに追放された 3 万人のエストニア人の中の一人でもなかった。その場所にただけなのに戦争により殺されてしまいました。戦争の影響を受けた世界の人々は、このような悲しい家族の物語を持っています。戦争の暴力で奪われるすべての人生は避けられる悲劇です。戦争は勝手に始まり勝手に終わることはありません。戦争は人間の決定の結果です。自由は他ならぬ私たち自身の手の中にあります。全てのものが調和し、共存することが必要です。争いでは生き残ることはできません。私たちは決定をすることができます。私は将来の世代が常に「平和を選ぶことを確信できる」という希望を持ち続けます。



第 3 1 回 日本語による世界平和弁論大会（2022 年 11 月 13 日）

最優秀賞受賞者 アグネ ピレサールさん

題 「『青と黄』の折り鶴」 広島中等教育学校（エストニア出身）

【要旨】2022 年 2 月 24 日、朝早く目が覚めて最初に耳にしたのは「ロシアがウクライナを侵略した」というニュースでした。その日はロシアからの独立記念日を祝う予定でしたが、驚きとショックで現実起こった事とは理解できませんでした。街では多くの場所でウクライナ支援の活動が始まり、ロシア侵略により約 10 万人の難民がエストニアに住んでいます。私の中でウクライナ移民の援助や協力の気持ちが増強になりました。心の高ぶりのなか、留学が決まり広島にきました。ある朝、クラスメートが「青と黄色」の色紙でウクライナに向けた折り鶴を作っていました。その姿に感動し参加の意向を伝え、一緒に「青と黄色」の色紙で折り鶴を作成しました。折り鶴は生徒の総力により大きなウクライナ国旗や巨大なポスターとなりました。私は日本からウクライナの平和を願う行動ができたことで、心が満たされました。平和に関心を持ち続け、他の人の意見に耳を傾け心に寄り添う。このことが世界平和への道と考えます。

最優秀賞の受賞者

第 1 回 1990 年 王 志松さん（中国）
第 2 回 1991 年 カン・サンさん（インド）
第 3 回 1992 年 アイリーン・チャ・ワン・ライさん（マレーシア）
第 4 回 1993 年 榮 勇さん（中国）
第 5 回 1994 年 アン・セーブルさん（フランス）
第 6 回 1995 年 アリソン・チャルム・チャイタットさん（タイ）
第 7 回 1996 年 ホリツ・オスさん（イスラエル）
第 8 回 1997 年 フルカット・フェイズさん（中国）
第 9 回 1998 年 アリソン・マクマランさん（オーストラリア）
第 10 回 1999 年 劉 艶さん（中国）
第 11 回 2000 年 リス・アブドゥラさん（インドネシア）
第 12 回 2001 年 ホン・パド・ロム・ド・サさん（コンボディア）
第 13 回 2002 年 朴 紅梅さん（中国）
第 14 回 2003 年 グレー・マズさん（アメリカ）
第 15 回 2004 年 シグ・アグー・チャンドルさん（タイ）
第 16 回 2005 年 任 麗潔さん（中国）
第 17 回 2006 年 ジャルワン・ティアンクンさん（タイ）

第 18 回 2007 年 エゼギャン・アイジャさん（アフガニスタン）
第 19 回 2008 年 カン・デ・イ・バラス・リヤさん（スリランカ）
第 20 回 2009 年 ルハナ・ヤ・エド・ネッパットさん（モリタ）
第 21 回 2010 年 シルバ・アデ・イルハナさん（アフガニスタン）
第 22 回 2011 年 アシカ・エ・ア・イナさん（アフガニスタン）
第 23 回 2012 年 スマイル・ワ・サ・イさん（アフガニスタン）
第 24 回 2013 年 シラ・バ・ネリスさん（ドイツ）
第 25 回 2014 年 任 欣雨さん（中国）
第 26 回 2015 年 ノバート・コリアさん（ドイツ）
第 27 回 2016 年 ウォーグ・ア・ナジコさん（スロバキア）
第 28 回 2017 年 フランシスカ・レベさん（チリ）
第 29 回 2018 年 サグ・アルチ・コヴァ・ペ・トラさん（スロバキア）
第 30 回 2019 年 カール・ス・ファン・カン・リスさん（スウェーデン）
第 31 回 2022 年 アグネ・ピレサールさん（エストニア）
第 32 回 2023 年 ラウラ・マリー・パロさん（エストニア）

※2020 年、2021 年は新型コロナウイルス感染症拡大のため中止